

Title	懐徳堂の文藝
Author(s)	神田, 喜一郎
Citation	懐徳. 1951, 22, p. 62-66
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90244">https://hdl.handle.net/11094/90244</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 懷徳堂の文藝

神田喜一郎

中井竹山が懷徳堂の講堂の兩楹に掲げた聯に

經術<sup>ハ</sup>心之準繩

文章<sup>ハ</sup>道之羽翼

と大きく書いてあつたといふ。この經術と文章とを並び尙んだことは、すなはち懷徳堂の學問の特色をなしたところであつて、おなじく朱子學を宗としながらも、山崎闇齋の一派などとは、全く步趨を異にした所以である。竹山は、この堂聯の説明に於て、「鄙生ノ蚤歲ヨリ學問修行ノ主意ハ、經術文章ノ二ツニアリ、此二ツノ到底ヲ究メザルハ、小成ニ安ズルノ器ニシテ、大成ノ業ニ非ズ。」といひ、また或る人に與へた尺牘の中にも、「山崎ノ諸儒ハ程子ノ說ヲ誤リ會シテ文章ヲ學者ノ大禁トスルコト甚グ僻事ナリ、實行ヲ廢シ虛文ニ馳ルコトハイカニモ禁ズベシ、實行ヲ主トシテ文業ヲ修ムルハ、學者ノ當然ノコトナリ、豈禁ズベケンヤ。」と稱してゐる。懷徳堂の學問が、いかに文章を尙んだかを知るべきである。

ところで竹山は何故に文章を尙んだのかといふと、いまの堂聯の「文章道之羽翼」の句の説明に於て、竹山は

コノ羽翼ノ翼ハ、輔翼ノ義ニハ非ズ、ヤハリ鳥翼ノ翼ニテ、飛シムルノ具ニ喩フルナリ、是ニ少シ說アリ、凡ソ四子六經ノ言、ミナ文ナリ、宋賢ノ邨後ノ不傳ノ緒ヲ繼デ、聖學ヲ再タビ明カニセル千言萬語、ミナ文ニ非ザルハナ

シ、是ヲ以テ道ヲ一世ニ傳ヘ後世ニ貽スヲ得ルハ、即チ道ヲ飛シムル也、文アニ道ノ羽翮ニ非ズヤ、ソノ文ノ美ナルユヘ、是ヲ千歳ノ後ニ傳ヘテ朽ズ、海外萬里ノ外マデニ及ブモノ、金翅鐵翮トモ云ツベシ、文豈輕視スベケンヤ。といつてゐる。これはつまり唐の李漢が韓退之の文集に序して、「文者貫道之器也」といひ、宋の周茂叔が通書の中に、「文所以載道也」といつてゐるのと、全くおなじ思想から出たもので、文章それ自體に獨立した價値を認めたものではなかつた。それからまた竹山は

學者文ニ暗ケレバ、經義ヲ求ムルニモ和習俗習ノアヤマリアリテ、聖賢ノ意ヲトリタガエルコトアリ、是細事ニ非ズ、故ニ經術文章迭ニ修メテ相待ザルコトヲ得ズ、コレ切要ノ義ナリ。

ともいつて、學者が經書を正しく解釋するのに文章を學ぶ必要のあることを強調してゐるが、要するに竹山にあつては、學問は經術に主體性があつて、文章はそれと必然的な關係をもつことに於てのみ價値をもつてゐたのである。かういふ考へ方は、おなじく朱子學を宗とした山崎闇齋の一派と對立したのみならず、その一方に於て、當時浪華の地に勢力のあつた、文藝そのものを主とする混沌社一派とも對立した。山崎の一派は經術派であり、混沌社一派は文藝派であり、懷德堂はその中間に獨自の立場を主張したのである。

かうした懷德堂の學風は、竹山の師、五井蘭洲によつて開かれたものらしい。西村天因博士の「懷德堂考」は、懷德堂の學問を敘すること極めて精詳であるが、創立當時の懷德堂を主宰した三宅石菴・中井髣菴の二人は、詩文に長ぜず、詞章を重んぜず、専ら道學を以て主としたのが、蘭洲に至つて、學力の根柢も深く、詩文にも長じたので、その意見に本づいて、懷德堂の學規に始めて詩文が加へられ、懷德堂の學風の一變を來し、やがて竹山・履軒の時代の盛を致したことが論じてゐる。わたくしは、いまだ蘭洲の詩文集たる雞肋篇や蘭洲遺稿を披讀する機會に恵まれないが、蘭洲は極めて博洽の通儒で、國典にまで通じ、それに優れた見識を有ち、詩文については、創作の才よりも、むしろ批評に

一隻眼を具へてゐたのではないかと思ふ。蘭洲茗話の中に

何人のいひしか、定家卿は歌つくり、西行は歌よみとなり。よくいひかたどれり。定家卿は明の王李に類す。西行は唐の元白に類す。

といふ一條の如き、簡單ながらも、その批評眼を見るに足るであらう。

竹山の詩文に對する意見は、その夤陰集に見えてゐる呈蛻巖先生書によつて窺ふことができる。蛻巖といふのは、當時文壇の泰斗と仰がれてゐた明石の梁田蛻巖のことである。竹山は、物徂徠の一派が明の王世貞や李于麟の説を奉じて、文は秦漢、詩は盛唐と限り、徒にその形貌ばかりを模倣しようとするのを排撃する、しかし詩は唐の純粹典雅なのを以て宗とすべきで、まづ立意、それから措辭、更に進んで格調、氣韻を講ぜねばならぬ、といふのである。さうして近體詩の聲律を講ずること甚だ細かで、その方面では、特に詩律兆と題する專著をさへ上梓してゐるのである。

竹山の詩については、田能村竹田がその詩話の中に「克實有餘。風趣稍乏。」と評してゐるのが適評で、いかにも學者の作品といふ感を免れないが、しかしその中には、竹田も唐人の遺響ありと許してゐる。

### 宮怨

清變搖夢響丁。錯謂君王向此經。不知綠陰多鬪雀。牡丹花上觸金鈴。

の如き、専門詩人をして後に墜若たらしめるものも尠くない。さうして上は風雅に擬した四言古詩から、下は七言絶句に至るまで、古今體詩の各體に互り、中には六言絶句といふやうなものさえあつて、凡て一千數百首の作品を遺してゐるのは、何といつてもその才に感心せざるを得ない。

それに竹山について、もう一つ驚くのは、普通の詩の外に填詞を試みてゐることである。竹山の時代に、浪華の地に

或る程度まで填詞趣味の勃興してゐたことは確かで、これより前、浪華と程近い和歌山では、祇園南海が既にこれを試みてゐるし、また竹山と並世の文人で浪華に住してゐた細合半齋の子の張庵といふ者なども、これを作つてゐるが、それにしても我が邦では填詞などまだ草味にあつた時代に於て、竹山のやうな藝術を第一とした *savant* が、これを逸はやく作つてゐるのは、まことに面白いことといはねばならぬ。もつともその填詞は、多くは壽賀の作で、餘り立派なものではなく、その上失調のところも見當るのであるが、ともかく填詞を作つてゐることだけでも感心である。

竹山の文章は、西村博士は詩の上にあるといはれてゐる。さうして竹山を、不文の譏多き宋學者中文章を能くした者として柴野栗山と並舉し、栗山の文は、東坡を學んで才氣横溢、流麗暢達之作多く、竹山の文は、熟練を経て苦心の痕を存するも、雄健にして波瀾老成なり、と評せられてゐる。博士は、特に文章の道に於て、桐城の義法を奉じ、これに深かつた學者であるから、その言はそのまま信じてよからう。鄙見を以てしても、江戸時代の儒者で、竹山ほどの文章家はさう多くはないと思ふ。

竹山の文章に於ける主張と造詣は、その藤江生なる者に答へた國字牘中によく現はれてゐるが、その文の長くして引用し得ないのが遺憾である。

ここに竹山の弟、履軒の文藝について述べねばならぬが、實のところ、履軒は懷德堂そのものとは餘り深い關係はなかつた。竹山の歿後、その遺囑によつて、しばらく懷德堂に教授をしたことがあるが、それも履軒の極く晩年の數年間のことに過ぎず、懷德堂の學問や文藝には、さして重要な關係はない。履軒のことは、いまは省く。

懷德堂の文藝として、もう一つ注意しておきたいのは、その書道を重んじたことである。三宅石菴は、書に工にして、頗る顔法に通じたといはれてゐる。五井蘭洲・中井甕菴、いづれも斯道に造詣深く、殊に蘭洲が正倉院の鴨毛屏風

の書を「文字のさま、正楷にて古雅なる書なり。」などと、甚だ通人ぶつたことをいつてゐるのは、當時の儒者として稀らしい。竹山の書を善くしたことは周知の事實で、その書學については、竹山國字牘の中に見える「答貞藏論字學」の一篇、それに奠陰集の中のいろんな題跋によつて、具さに窺ふことができる。竹山も、わが小野道風の書と傳へられる秋萩帖や、道澄寺鐘銘などに深い注意をむけてゐるが、おそらく蘭洲あたりからの、さうした傳統を承けてゐるものと思ふ。

○  
懷德堂の學風は、極めて穩健にして中正を得たものであつた。經術を主としながらも、文藝を棄てず、少しも偏狹なところがなく、單に文藝についてだけでも、輝かしい成績をあげたのであつた。わたわたくしは浪華の地に、一般教育機關として、懷德堂の榮えたのは、過去に於ける大阪市民の幸福であつたと思ふと共に、今後に於ても、かういふ學風こそ更に興隆せしむべきものと確信する。